

平成 22 年度 事業報告書

(平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで)

学校法人 武蔵野学院

I 法人の概要

設置校の所在地

- 武蔵野学院大学大学院（国際コミュニケーション研究科）
武蔵野学院大学（国際コミュニケーション学部）
武蔵野短期大学（幼児教育学科）
〒350-1328 埼玉県狭山市広瀬台 3-26-1
- 武蔵野高等学校
武蔵野中学校
〒114-0024 東京都北区西ヶ原 4-56-20
- 武蔵野短期大学附属幼稚園
〒350-1321 埼玉県狭山市上広瀬 1100

設置学校の収容定員・学生数

学校名	収容定員	在籍数
武蔵野学院大学大学院	20	21
武蔵野学院大学	510	419
武蔵野短期大学	200	197
武蔵野高等学校	1360	850
武蔵野中学校	360	68
武蔵野短期大学附属幼稚園	175	163

※在籍数は平成23年3月31日現在

大学3年次編入15名

役員・評議員・教職員の概要

[役員]

理事	理事長	高橋 暢雄	監事	監事	高柳 清
	理事	西久保栄司		監事	石井 満
	理事	大久保治男			
	理事	清水 武信			
	理事	伊藤 昌毅			
	理事	宮本 一史			
	理事	久保田 哲			

[評議員]

評議員 西坂 章 他 計17名

[教職員（専任）]

法人本部	1名
大学・短期大学教職員	65名
中・高教職員	63名
幼稚園教職員	14名

※いずれも平成23年3月31日現在

II 平成22年度事業実施報告

1. 法人全体

学校法人武蔵野学院では、児童・生徒・学生の状況を理解し、国際化・情報化の進む社会からのニーズに応えるべく、様々な教育活動に邁進している。

なお、平成22年度中に行った主な工事等は以下のとおりである。

(1) 西ヶ原キャンパス

- 4号館省エネ型空調設備交換工事
- 5号館改修工事 (eステーション)
- 生徒用机・椅子購入
- 4号館トイレ改修工事
- 地デジ工事

(2) 狭山キャンパス

- 幼稚園エアコン工事
- 1号館・食堂女子トイレ改修工事
- 無線LAN設備工事
- OAトレーニングルームPC入替

(3) 箱根芦ノ湖レジデンス

- 体育館耐震補強工事
- 地デジ工事
- 屋外プレハブ冷蔵庫入替

(4) 北海道キロロレジデンス

- 学校車購入
- 給湯器取替

2. 武蔵野学院大学

平成16年4月に開学した武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科は、開学7年目を迎えた。この間、平成19年度には、文部科学省による完成年度の履行状況に関する調査が行われた。その結果、当初の申請書類の計画に基づいて

履行していることが確認され、留意事項なしの評価を受けた。

平成20年度には財団法人日本高等教育評価機構による第三者の認証評価を受けた。その結果、評価機構が定める大学評価基準を満たしているとの認定を受けた。

平成22年度は、文部科学省、中央教育審議会教員養成部会による教職課程に関する実地調査が行われた。この調査結果の正式な文書は受理していないが、その実地調査においては、もっと多くの学生が教職課程を履修するように指導することが望ましいこと、教育実習前の学内の教職試験の実施は先見的な取組みであること、教育実習の母校実習は好ましくないこと等について口頭で指摘を受けている。この指摘を受けて、平成23年度よりその改善に向けて教職センターを中心に取組んでいる。

(1) 教育活動

教育活動の基本的な方針は平成21年度と同様に、言語の分野では、新たに英語のアメリカ人の准教授を採用し、国際語である英語の会話力・読解力・作文力の基礎能力、応用能力の強化を行った。英語を母語とする専任教員が2名となり英語を用いたプレゼンテーションやビジネス英語、英語によるインターネットの利用等、幅の広い講義が展開することが可能となった。

世界最大の使用人口を持つ中国語に関しては、これまで母語を中国語とする3名の教員を配置して講義を展開していたが、平成22年度は大学院博士後期課程の申請に関連して新たに1名の教授を増やし講義を充実させた。中国文化事情をはじめ、中国人が中国をどう理解し研究しようとしているのか、それは日本人が中国を理解する視点とどう違うのか、多角的な視野により中国とのコミュニケーションについて教育、研究する幅が広がった。

夏季休暇中には韓国語、スペイン語の講習会を開いた。大学の通常の講義で展開している日本語、英語、中国語の他に語学を学ぶ機会を増やした。この講習会に参加し、韓国語に興味を持った学生が、本学と交流協定を結んでいる又石大学に2月末より半年間交換留学生として渡韓している。本学の Semester 制度を用い、休学することなく留学が可能となり、優秀な学生であったことからこの間の本学の授業料等を減免する奨学生に採用した。

又、異なる他者とのコミュニケーションを実現していくツールとしてのコンピュータ技術の指導については、新たに夏季休暇中にコンピュータを最新式に変え、日進月歩の技術革新に対応した取組みを行った。情報機器に明るく多くの情報を収集しそれを取捨選択出来る能力を養い、著作権保護の道德心を涵養し、国際人としての基本的な情報処理能力の向上に努力した。

座学の教育のみならず、インターンシップやボランティアの授業、海外研修（カナダ、中国）を実施して、行動、体験型の学習にも力を入れた。インターンシップでは一般企業のみならず、北海道のキロロの郊外宿泊施設を利用し赤井川村の役場の協力を得て農家での農業体験を実施した。食の安全が叫ばれている現状で、農業の実態を実体験できる取組みは、農業が国際競争の渦に巻き込まれる中で日本が現場でどのような取組みを行っている

るかを学ぶチャンスになっている。

新入生については教務部が中心となってオリエンテーションを実施し、クラス担任制度を設け、毎週1コマ、HR（キャリアガイダンス）を行った。学生生活に慣れ親しむことが出来るようにきめ細かい指導を行った。2年生は学年担当の教員を配置して学生指導を行い、3、4年生はゼミ担当の教員による学生生活全般に亘る指導を行った。

教員の能力向上の取組みは、授業参観の実施や自己点検、自己評価の提出、学生による授業評価を行った。教務部のディスクロージャー担当が中心となってそれを纏め、各教員にフィードバックし、よりよい授業等の展開となるよう指導している。新任教員には教員研修を実施し教育支援体制の充実を図っている。

地域・社会貢献としては、コラボレーション講座、公開講座、ビズ・キッズ、ワイワイ広場を行った。地域に開かれた大学を標榜し、これらの取組みも数年を経過し地域社会に定着した催しに成長している。

大学祭では10月に2日間実施したが1万名を超える入場者があり、例年通りの賑わいを見せた。学生の積極的な参加を促し、模擬店では各ゼミが何らかの取組みを行い3、4年生がリードする大学祭運営になる様工夫した。地域からの大学祭参加の取組みもあり、子どもから大人まで楽しめる内容となっている。

又、クラブ活動では、陸上部が昨年に引き続いて箱根駅伝の予選会に出場した。昨年度は予選会が大学祭と重なっていた為、応援に駆けつけることは出来なかったが、今年度は学友会が中心となって立川の昭和記念公園に出向き、大学の幟旗を振っての応援となった。予選会に出場の各大学とも幟を立てて母校の名誉をかけて応援しており、関東地区での本学陸上部の実績をアピールする機会ともなった。箱根駅伝の本選出場とまではいかなかったが、昨年度より成績を伸ばしており、来年度に期待がもてる結果となった。

(2) 入試活動

学生募集については、系列高校からの進学者をはじめとして、質の高い学生を確保しようと努力した。系列高校以外の高校については、入試担当者が高校訪問して進路指導を訪ね、本学の教育理念と実践についての説明を重ね、理解を促してきた。オープンキャンパスの参加人数は若干上向きの成果を挙げた。オープンキャンパスでは、新入生に全員 iPad の無償貸与を行い情報端末の操作に明るい人材育成が国際コミュニケーションを実現する相応しいツールであることをアピールしてきた。

海外の留学生の募集については国際センターを中心に中国に出向いて行った。海外の提携大学を中心に日本語能力に優れ、大学の講義についていける学生の募集を行った。昨年度は秋に中国と尖閣諸島問題が発生し、それに伴う反日運動もあり留学を控える状況に直面し、従来と比してその成果を十分挙げることは出来なかったが、学習意欲に富む留学生を少人数、入学させることが出来た。

各高校への出張講義や説明会に出来るだけ多く参加し、高校生一人ひとりに直接アピールを行った。本学のホームページ、チラシ、パンフレット、ポスター、西武線車内連合広

告等、広報媒体を活用して告知を行った。陸上競技部の箱根駅伝を目指す高校生の募集にも力を入れてきた。

結果的には入学定員を確保することは出来なかったが、オープンキャンパスの参加者が増えてきたこと等明るい材料もあり、弛むことなく学生募集活動を行っていく。

(3) 研究活動

研究面では、専任教員には研究費支給に基づく個人研究活動と共に、日本総合研究所の学外研究者も含めての合同研究を行っている。日本総合研究所では、学外の研究等で顕著な業績を残し、本学の教育理念に協力して戴ける優秀な人材を客員教授、客員研究員として迎え入れ、共同研究や公開講座等で本学の教育・研究の発展に尽力してもらっている。これらの研究成果は『武蔵野学院大学研究紀要』、『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』として発刊した。

(4) 就職支援

3年次には、4月より就職部を中心にガイダンス等を行い、積極的な就職・進路支援を行ってきた。キャリアアップを狙い、学外講師を依頼して資格講座を開講した。学内に企業の採用担当者を招いて、企業説明会を開催した。就職の模擬試験に実施し、実践的な取り組みを行ってきた。埼玉西部地区の大学が地元地域の企業と合同で説明会を年に2回行っており、本学も参加し学生の積極的な参加を促した。

社会の景気悪化に伴い、本学の就職状況は必ずしも好転しなかったが、諦めることなく最後まで粘って積極的に就職活動を行った学生のほとんどは就職を決定することが出来た。又、留学生においては帰国して就職する学生もいたが大学院に進学した学生数も相当数あった。

(5) 日本語別科

本年度より日本語別科が開学した。外国人留学生に対して、日本語を修得せしめ、併せて日本文化等について理解を深め、国際社会で貢献できる人材を育成することを目的に学則変更による日本語別科を設立した。日本語能力は母国で日本語検定3級を取得し、本学別科で2級を取得させることが目標とした。初年度は中国で募集を行ったが希望者がおらず、講義を行うまでに至っていない。

3. 武蔵野短期大学

武蔵野短期大学幼児教育学科は、昭和56年に開学し、平成22年度は29年目の歴史を数える。この間4318名の卒業生を送り出し、29年間にわたる幼児教育者養成の伝統を踏まえ、年々着実な成果をあげている。

平成22年度は、教員免許課程認定大学として中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会委員による実地視察を受け、母校実習等の点について改善の指摘をいただいたが、概ね高い評価を得ることができた。

(1) 教育活動

① 3免許資格取得の常態化

「幼保一元化」の動きの中で、本学では従来から、学生全員に幼稚園教諭免許・保育士資格の二つの免許資格を取得することを奨励してきた。近年は、学生の社会福祉への関心の高まりがみられ社会福祉士任用資格を加えた3免許資格取得が常態化しており、平成22年度は、3名を除く卒業生全員が上記3免許資格を取得し卒業した。

② 実践力ある保育者の養成

開学以来、本学が重視してきたことは、優れた専門性の涵養と厳しい職業的倫理性を兼ね添え、卒業後すぐに教育・保育現場で力を発揮できる実践力ある保育者の養成である。2年間で5回の教育・保育実習では、心身の自己管理の仕方、他者への適切な接遇のあり方、教材研究の方法、具体的な保育技術とその活用方法についての指導を、授業を始め附属幼稚園におけるプレ実習などの事前指導、実習中の巡回指導、事後の実習成果の整理に至るまで綿密な計画の下で実習指導をしている。また本年度は、昨年度の実習担当教員が作成した「実習の手引き」を更に改訂し実習指導の万全な展開を図ってきた。加えて、「お城フェスタ」をはじめとする附属幼稚園の各種行事や、近隣市の社会貢献活動における保育活動等、実習以外の場においても実践力を養う工夫をしている。

③ FD 活動の強化

教育課程実施の中核をなす授業については、学生の授業評価等を参考にして授業改善のための事例研究会、新任者教員研修会に加えて、21年度より月例化した教職員の職能向上のためのFD科会を続けて実施した。FD科会では、授業改善のほかに、学生理解の深化と指導援助の方法の改善、各種校務に関わる能力向上等について話し合い、共通理解と共通実践をすすめてきた。

(2) キャリア・ガイダンス

① 就職活動

四半世紀の歴史の中で、幼稚園・保育園との深い信頼関係を築く努力を重ね、平成22年度も就職を希望する学生は100%の就職率を得た。全教職員が連携協力し、個々の学生の就職にかかわる相談活動をしてきた結果である。

② 進路ガイダンス

時間割の中に「進路ガイダンス」の授業が位置づけられているのが本学の特色の一つである。学生は保育者を目指して入学してくるが、中には単なる職業的夢の段階にとどまっている学生もいる。進路ガイダンスの授業においては学生の職業的社会化をすすめる学習を重視し、自己の生き方を表現するのに最も相応しい職業としての保育者の選択ができるように指導援助してきた。

また、1学年次に実施されるキロロ宿泊研修は、「進路ガイダンス」の授業と共に保育者の道を選択する強い動機づけになっている。なお、「進路ガイダンス」の授業は、短期大学設置基準の改正の趣旨に鑑み「キャリアガイダンス」の授業として生まれ変わるが、

従来の実践の上に立ち学生のキャリア形成への関心を高め就業力の一層の向上に力を尽くす。

(3) 入試活動

学生募集については、昨年度に引き続いて募集定員を確保することができた。教職員全員が危機感をもって学生募集業務に努力した結果である。今後は、オープンキャンパスや高校訪問のあり方、指定校の再検討、広報活動の充実等の募集業務の改善を図っていききたい。

(4) 社会貢献活動

地域密着を目指す本学では、従来から市民を対象にした公開講座、高大連携のコラボレーション講座、施設等への学友会クラブによる社会貢献活動等を実施してきた。本年度の公開講座の中に、幼稚園児とその家族を対象にした「家族宇宙教室」を開催し好評を得た。

4. 武蔵野学院大学大学院

平成19年4月に開学した武蔵野学院大学大学院国際コミュニケーション研究科国際コミュニケーション専攻（修士課程）は平成20年度に完成年度を迎え、文部科学省より履行状況の調査が行われた結果、特に留意事項なしの評価を受けた。平成21年度には、寄付行為変更に関する履行状況の調査が行われ、これも特に留意事項無しの評価を得た。

本大学院では、知的基盤社会を支え、高度な職業的舞台で活躍できる国際コミュニケーションに関する専門的知見を有した人材養成を目標に教育・研究を行っている。価値観が多様化する現代社会において、文明・文化の違いを乗り越え、積極的かつ自主的に他国の人々との交流に取組み、他者理解を根底においた共生の理念をもって国際的な相互理解を実現していくことを目指している。

大学院で平成22年度に修士論文を提出した院生は9月修了で6名、3月修了で6名であった。修士論文の学位審査は、主査、副査による厳正な審査を行い、最終的に研究科委員会の審議を経て、学位記授与の認定を行った。その結果、12名に修士（国際コミュニケーション学）の学位を授与した。

論題の数編を挙げれば「現代における西太平洋の地政学的一考察」「日中貿易の発展と諸課題—とくに1980年代以降を中心として」「日本自動車工業の技術革新と経営戦略に関する一考察」「日中の流行語の比較について—若者言葉を中心として」「格助詞「から」の用法について」「中国高速道路網の整備と産業構造、物流の変化—山東省を例に」「現在まで残っている江戸時代食文化と中国食文化の比較」等である。

懸案であった博士課程は、平成22年5月末に文科省に認可申請書を提出した。博士課程は、修士課程を博士前期課程とし博士課程を博士後期課程とすることで、博士前期課程は国際コミュニケーション専攻とし博士後期課程は日中コミュニケーション専攻とした。国際コミュニケーション専攻は研究の幅が広く、博士論文執筆に導く研究指導に困難が伴うことから、研究分野を絞って日中のコミュニケーションに集中して研究できるカリキュ

ラムを編成し、教授には新たに日本語研究に関する業績顕著な教員を招聘し6名の専任教授を配し、兼任教授3名、非常勤講師3名の構成とした。

9月には補正申請書を提出し、10月末に留意事項なしの評価を受けて認可が降りた。博士後期課程は平成23年4月に開学し、順調に進捗すれば、平成25年度末には本学より課程博士の第一号が誕生することになる。課程博士においては、博士後期課程の教育課程から選択必修を含めて8単位を履修し博士論文の研究指導を受けた上で、その審査に合格した院生に授与される。

博士課程の申請に当たっては、同時に修士課程のカリキュラムの見直しを行い、研究にシフトした内容とする為に、一部の科目を統廃合すると共にこれまで選択科目で単位を付与しなかった研究指導を必修科目とした。研究指導の必修科目で履修単位が8単位となり、院生の研究内容に踏み込んだ指導が行われることになった。この教育課程は平成23年度入学生より摘要される。

5. 武蔵野中学・高等学校

(1) 中学校

武蔵野中学校では、生活面においては今年度も「安易に遅刻や欠席をしない」ということを主眼に指導をしてきた。その結果、全体のおよそ8割の生徒が1カ年の精皆勤を達成した。このことは生徒本人に対する指導も勿論だが、家庭の理解なしには不可能なテーマである。武蔵野中学校としては今後も「家庭と学校との連携」を生徒指導上の欠かせない要素のひとつとして大切にしていきたい。その他の生活指導として、生徒自身の集団の一員としての自覚の醸成から始まり、段階的に集団の中での個人に目を向けさせ、最終的には個を完成させるといった、武蔵野中学校が今まで行ってきた指導も充実させた。また、学年を超越した縦割りの指導にも注力している。これらの成果として、多面的な集団活動と、その集団の中での個人をどのようにとらえるかなど、本校の校訓である「他者理解」を実践するための基礎的な人間としての能力を身につけることができている。

学習面においては、平成21年度より開始した英語教育が武蔵野の英語教育として浸透しつつあることがあげられる。週6時間の英語の時間すべてがネイティブによる授業で、しかも、従来の教科書学習を中心とした座学ではなく、あらゆる分野をテーマにして、そのテーマを英語によって探求するという、所謂ワーク型の授業である。開始当初は生徒も戸惑いを隠せなかったが、ネイティブに慣れるに従って英語そのものを「勉強」としてだけで捉えるのではなく、コミュニケーションのためのツールのひとつとして捉えるようになってきた。知識としてのみの英語ではなく、実際に使える英語として生徒の中に徐々に浸透しているようである。

(2) 高等学校

武蔵野高等学校では、生徒の学校生活への主体的な関わりをどのように持たせるか、という点にポイントをおいて指導してきた。学校生活に参加することを大前提として、安易

な遅刻や欠席の撲滅に注力した。また、体育祭などの学校行事や、箱根やキロロの施設で行われる林間学校などの学年行事を通して、まずは参加することの重要性を説き、その中から、他の生徒や教員との協調から生まれる充実感や達成感など数多くの成功体験を積み重ねることによって「みんなでやるから高いところにいける」という意識を生徒自身が実感できるよう配慮してきた。この実感によって、日常の学校生活の中で自分という存在を客観的に認識し、そのことがさらに周囲への配慮や理解、すなわち本校の校訓である「他者理解」へとつながるはずである。

学習面については、今年度は平成24年度に向けての準備期間と位置づけた。新教育課程の全面実施に向けてのカリキュラムの見直し、現状の生徒のレベルにあわせた受験指導の再考など、現カリキュラムとの整合性を確認しつつ慎重に取捨選択や新規開拓を行った。また、ステージ制の再構築も念頭に置くなど、来年度へ向けて有効な活動がなされた。

6. 武蔵野短期大学附属幼稚園

武蔵野短期大学附属幼稚園は、昭和57年の開園から28年目を迎え、平成22年度は冷房も完備し、施設の充実が図られた。

(1) 教育活動

幼稚園は、満3歳から満5歳までの幼児期における様々な発達の特徴を持つ子ども達を教育している。平成22年度も、日常の保育において、各年齢の発達段階を踏まえ、基本的な生活習慣の育成に重点をおいた。特に小学校との接続が求められていることから、健康で安全な生活の仕方、友達とのコミュニケーション、集団生活と学び等、幼児期の基礎を「人」や「もの」との関わりから自ら行うことから学ぶようにした。各行事の実施については、教職員が行事の意義を共通理解し、日常の保育を生かせる内容で指導にあたった。その結果、幼児はこれまで以上に目的意識を持って活動でき、達成感を得られたように思われる。保護者にも、行事を通して一体感と温かみのある日常の活動を伝えることができ、一層、園行事に協力が得られた。

(2) 地域貢献

地域の方々へ日頃の幼稚園の活動への理解と協力に感謝し、地域貢献の一環として、未就園児のいる家庭を対象に、大学・短大と協力し、次の活動を行った。

・ 園庭開放

子ども達には子ども社会での遊びの場を、保護者には子育て仲間との対話の場を、保育に支障のない午前中に実施し、身近に感じ取れる園を目指した。

・ 地域貢献活動（春・秋むさしのまつり）

春秋各1回、短大幼児教育学科と大学の学生、高校の生徒、幼稚園の教職員で、就園前の子どもと家族を対象に、折り紙やお絵描き、紙芝居の鑑賞、マットや巧技台などでの運動遊びを実施した。また、子育てに関する資料提供や幼稚園教員が子育ての相談に応じるなど、地域の方々と密着した内容で行い、園への関心を高めてもらうことができ

た。

この活動に参加した学生・生徒は、子ども達と関わることの楽しさ、喜ばれたことの感動など、貴重な経験を積むことができた。また、幼稚園教員としても、就園前の子ども達の状況や保護者の思いや願いを知ることができ、今後の子育て支援活動、保育活動に生かしていきたい。

- 子育て支援活動（お城フェスタ）

就園前の2、3歳の幼児を対象に、10月まで計8回実施した。活動内容は、幼稚園や保育園等の幼児施設での入園してからの集団生活を視野に、子ども達へは生活習慣の基盤作りの活動を、また保護者には子どもの生活リズムをアドバイスした。この活動は入園と深くつなげることができた。

（3）園児募集活動

本年度、これまでの園児減少から増加に転じ、70人を超える入園予定者を確保できた。今後とも就園前から卒園までの子ども達を対象とした活動や特色、園の良さを積極的にアピールしていきたい。